

中国人日本語学習者同士の 初対面会話における話題展開パターン —日本語と中国語の会話を通して

李 宇霞

◆要旨

本 研究では中国国内での日本語学習者を対象とし、初対面の学習者同士の日本語会話と中国語会話における話題展開パターンの異同を探ることを目的とする。

結論として、学習者同士の初対面日本語会話では「質問—応答型」が「相互話題導入型」より多い一方で、中国語会話では「相互話題導入型」が「質問—応答型」より多く使用される傾向にあることが分かった。また、カイ二乗検定をかけた結果、有意水準5%で有意差が認められた。

この結果を踏まえて、日本語教育への応用可能性として、「質問—応答型」から「相互話題導入型」へと会話指導を行うことが挙げられる。

◆キーワード

初対面会話、中国人日本語学習者、話題展開パターン、「質問—応答型」、「相互話題導入型」

◆ABSTRACT

This study aims at investigating the similarities and differences in the topic development patterns of initial conversations carried out in Japanese and Chinese between Chinese learners of Japanese.

This study showed that during initial conversations in Japanese, learners tend to prefer a Q&A type interaction to an interaction in which new topics are introduced by both sides (“interactive topic introduction type”), whereas “interactive topic introduction type” is more prevalent over the Q&A type interaction when they converse in Chinese. The results were obtained using a Chi-square test, and the significance level was 5%, showing statistical significance.

Based on the result of the study, a suggested application to Japanese language teaching is to shift the focus of conversation instruction from a Q&A type interaction to an “interactive topic introduction type”.

◆KEY WORDS

initial conversation, Chinese learners of Japanese, topic development pattern, Q&A type interaction, interactive topic introduction type

Topic Development Patterns of
Initial Conversations between
Chinese Learning Japanese
As shown in their Japanese and
Chinese conversations

LI YUXIA

1 はじめに

会話の中でどのように話題を展開するのかは、円滑なコミュニケーションを営むために重要な問題の1つである。特に人間関係を築く第一歩である初対面会話において、どのように適切な話題展開を行うのかということは、日本語学習者にとって非常に難しいことであると思われる。

これまで初対面会話の研究において、日本語学習者同士の会話については、あまり注目されてこなかった。しかし、国際交流基金2009年の調査によると、中国では高等教育における日本語学習者数が529,508人に上り、その数は年々増えているのに対し、日本語教師はわずか9,450人とどまっている。日本語母語話者教師の数は更に少なく、日本語教師全体の15.9%に過ぎない。そのため、中国における日本語教育現場においては、日本語母語話者教師と学習者の会話より、学習者同士で日本語の会話を行うことが多いという傾向にある。こうした海外における日本語の学習環境を考慮し、学習者同士の会話から中間言語としての特徴を研究する必要があると思われる。

2 先行研究

本研究が関連する先行研究について、研究対象の観点から以下の3種類の研究が見られる。

- ① 日本語母語話者同士の会話
- ② 日本語母語話者と非母語話者の会話
- ③ 日本語母語話者と中国語母語話者の会話の比較（日中対照研究）

日本語母語話者同士の初対面会話の研究としては宇佐美（1993, 2001）、宇佐美・嶺田（1995）、三牧（1999）、中井（2003）等が挙げられる。その中で、話題展開パターンに焦点を当てるのは宇佐美・嶺田（1995）のみである。その研究では男女各1名ずつのベースとなる被験者と、同性の「目上・同等・目下」、

異性の「目上・同等・目下」に当たる6人の相手との30分間の会話を合計12会話収集し、そのうち有効データである11会話を分析した。その結果、1) 目上が話題を導入して会話をリードする傾向が強く、その導入の仕方は初対面の会話ということもあり、質問形式が多い、2) すべての会話は「導入部」「展開部」「終結部」で構成される、3) 個々の話題の展開は、「質問-応答型」「相互話題導入型」の2通りのタイプに分けられる、という特徴が見られた。宇佐美・嶺田（1995）の研究対象は全て日本人母語話者であるために、学習者同士の話題展開パターンに関しては触れられていない。

また、日本語母語話者と非母語話者の接触場面における初対面会話の研究は西郡（1996）、佐々木（1998）、熊谷・石井（2005）等が挙げられる。その中で佐々木（1998）は日本人同士、日本人とアメリカ人、日本人と中国人の同性と異性の2人1組による各20分間の日本語会話（計54の事例、合計17時間）を、時間経過に伴う発話頻度の差の観点から考察した。その結果、同文化の状況では、会話の開始から5-10分間に発話頻度の減少率が大きいこと、異文化の状況では会話の開始から10-15分間で徐々に減少することが示され、初対面会話の発話が最も集中しているのが会話の最初の15分間であることが分かった。従って、本研究では話題展開パターンを考察するため、中国人日本語学習者同士の会話時間を日本語と中国語の両方とも15分間に設定することにした。熊谷・石井（2005）は、会話においてどのような話題を進んで取り上げるか、または話題にしたくないと考えるかについて、日本人と韓国人にアンケート調査および面接を行った。しかし、「アンケート調査は明示的に意識を問うことができるが、抽象的な形での情報収集となり、会話データ分析のように特定の話題が実際のやりとりの中でどのように導入され、発展し、収束するのかはつかめない」（p.104）と指摘している。このことより、本研究ではアンケート調査という形をとらず、学習者の初対面会話データに基づく分析を行う。

さらに、初対面会話における日中対照研究としては張（2006）がある。台湾と日本の女子大学生20名ずつ（合計40名）の初対面会話を収集し、最初の5分間を分析対象とし、初対面会話フレームの観点から分析したが、研究対象は日本人と台湾人の両言語使用上の相違であり、中国人日本語学習者会話の特徴についての会話分析は行われていない。

以上の先行研究を踏まえた上で、中国での日本語教育事情を配慮すると、中間言語としての学習者同士の日本語会話にはどのような特徴があるのか、母語である中国語と同じようなメカニズムによって会話が行われているのか、検討する必要があると思われる。

そこで、本研究では中国人日本語学習者（以下は「学習者」と称する）を対象とし、学習者が初対面において日本語で会話する場合と中国語で会話する場合とを比較し、話題展開パターンにどのような違いがあるのか、明らかにすることを目的とする。

3 研究方法

3.1 言語社会心理学的アプローチについて

本研究では、宇佐美（1999）が提唱する「言語社会心理学的アプローチ」に従って分析を行った。その研究プロセスには次の6点が含まれることが必要だとされている。

- (1) データ収集の際の条件統制
- (2) フェース・シート、フォローアップ・アンケート（インタビュー）を利用したインフォーマントの背景的情報の収集と、その定量的分析
- (3) 定量的分析を視野に入れた文字化資料作成
- (4) 定量的分析を視野に入れた分析項目のコーディング
- (5) 評定者間信頼性係数Cohen's Kappaを使用したコーディングの信頼性の確認
- (6) 記号化しきれない現象の定性的分析

3.2 協力者（被験者）

協力者の選定は3.1における「データ収集の際の条件統制」という研究プロセスに基づいて行った。まず、学年・性別・日本語能力という条件を統一する。

本研究では、中国河北省にある大学の日本語科4年生の女子大学生（21～23歳）から、日本語能力試験1級に合格している学生を選ぶことにした。

次に、初対面の条件を満たすため、当校の本校から10名をベース協力者として選び、分校（二級学院^[註1]）から日本語会話と中国語会話の相手を協力者としてそれぞれ10名ずつ選んだ。ベース協力者はそれぞれ目標言語である日本語と母語である中国語で相手と会話する。本校と分校ではキャンパスが異なり、学生の交流がないため、必然的に初対面会話となる。具体的な組み合わせは以下の表1に示す通りである。

表1 学習者初対面会話の組み合わせ

ベース協力者（本校）	会話の相手（分校）
CFBn	（日本語）NCFn
	（中国語）CFn

注) 記号の意味 C: 中国人 F: 女性 B: ベース協力者 N: ノンネイティブスピーカー（学習者の日本語での会話の相手） n: 通し番号（1-10）

3.3 実験手順

まず、協力者に、同意書へのサイン、そしてフェース・シートへの記入をしてもらい、会話のデータを収集する。2名1組とし、教室において2人だけで15分間日本語で自由会話をさせ、それをテープに録音する。すべての会話は、名前も含め、互いにほとんど相手についての情報を知らされていない初対面同士の会話である。協力者には特に話題を与えず、なるべく自然に自由に会話するようにとの指示をする。また、会話終了後にフォローアップ・アンケートを行い、会話の自然度について5段階評価で評定してもらい（宇佐美1993, 2001等の手順に準じる）。

日本語での会話が次の中国語での会話に影響を与えないように、1週間の間をおき、同じ手順で学習者の中国語の初対面会話データを取る。その後、フォローアップ・インタビューを実施し、会話の感想などについて自由に述べてもらう。

収集した日本語会話は宇佐美 (2007a) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System For Japanese: BTSJ)」に従って文字化した上で分析資料としている。中国語会話データは宇佐美 (2007b) の「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System For Japanese: BTSJ) の中国語への応用について」に従って文字化した上で分析資料としている (以下それぞれ「日本語データ」「中国語データ」と称する)。

3.4 分析項目

3.4.1 「話題カテゴリーの分類」

収集した日本語と中国語のデータを宇佐美 (1998) に倣って発話文ごとに次の3つのカテゴリーによって分類する。

- (1) 挨拶 (G) : 最初の挨拶、自己紹介部分の発話
- (2) 話題導入 (I) : 1つの話題の枠の発端となったと解釈される発話
- (3) 非話題導入 (N) : 上記の2種類以外の発話

3.4.2 話題展開パターン

本研究では定量的分析を視野に入れるために、宇佐美・嶺田 (1995) の話題展開のパターン^[註2]に倣い、会話中に現れるやりとりを次の2つのタイプに分類する。

タイプ I : 「質問-応答型」(Q)

タイプ II : 「相互話題導入型」(S)

3.4.2.1 タイプ I : 「質問-応答型」(Q)

参加者の1人が質問形式で話題を導入し、それに対して会話相手が返答するという型である。会話例1に示すように、NCF2の「学年論文のテーマは何ですか」という質問に対してCFB2が答えを返している。このように、話者Aが質問形式で話題を導入し、話者Bがそれに答えるというパターンが「質問-応答型」である。

会話例1

ライン番号	発話文終了	話者	発話内容	カテゴリー	展開パターン
118	*	NCF2	「CFB2姓」さんはこの学年論文のテーマは何ですか。 ^[註3]	I	Q
119	*	CFB2	テーマは、私のテーマは武士道とヨーロッパのきしどら '騎士道' です。	N	

中国語の会話データも同じようにコーディングする。会話例2に示すように、CF8が「大学院の入試を受けますか」という質問形式で話題を導入し、CFB8はそれに答え、会話を進めていくというパターンを「質問-応答型」と認定する。

会話例2

ライン番号	発話文終了	話者	発話内容	カテゴリー	展開パターン
24	*	CF8	那你考研? じゃ、大学院の入試を受けますか。	I	Q
25	*	CFB8	〈边笑边说〉不想考研。 〈笑いながら〉受けるつもりはないです。	N	
26	*	CFB8	反正上公司在说反正不是很想当翻译, 到时候再说吧。 とりあえず会社に就職して、あまり通訳にはなりたくないですが、その時また考えます。	N	

3.4.2.2 タイプ II : 「相互話題導入型」(S)

参加者同士が互いに話題を導入し合うものであり、参加者の1人が話題を導入すると、その会話相手がそれに返答し、さらにそれに関連した新しい話題を導入していくという型である。つまり、共通した話題について、お互いの意見が交換される形になるため、どちらかが一方的に話題を出すのではなく、それぞれが新しい話題を出し合うことによって会話を進行させていくというパターンである。

会話例3

ライン番号	発話文終了	話者	発話内容	カテゴリー	展開パターン
31	*	NCF9	好きですか。	I	Q
32	*	CFB9	うん、本当に好き、だんだん好きになりました。	N	
33	*	CFB9	あのう、大学に入る前、あのう、その、自分がその科目を選ぶとき、日本語と、日本語を選びました。	I	S
34	*	NCF9	そうですか。	N	

会話例3のように、2人は専攻について話し合っているが、まずNCF9が「(専攻は)好きですか」と質問している。CFB9はその質問に答えた後、大学受験の前の科目選択という話題を導入した。つまり、お互いに話題を提供することによって会話が進められている。このようなパターンを「相互話題導入型」と認定する。

中国語会話データでも同じように話者がお互いに話題を導入し合うものを「相互話題導入型」とする。会話例4に示すように、2人はCFB2の故郷について話し合っているが、まずCF2が「青島から遠いですか」と聞いて、それに対してCFB2が答えている。またその答えについてCF2がコメントした後、今度はCFB2が自分の故郷の歴史を紹介するという、新しい話題を導入している。この場合が参加者のCF2が話題を導入すると、その会話相手のCFB2がそれに返答し、さらにそれに関連した新しい話題を導入していくパターンであり、「相互話題導入型」と認定される。

会話例4

ライン番号	発話文終了	話者	発話内容	カテゴリー	展開パターン
15	*	CF2	那个，淄博离青岛远吗？ あのう、淄博は青島から遠いですか。	I	Q
16	*	CFB2	啊，坐火车大概有4-5个小时吧。 ええと、汽車でおよそ4-5時間でしょうね。	N	
17	*	CF2	是吗，这么远。 そうですか、そんなに遠いですか。	N	

18	*	CFB2	淄博那块儿就是，就是春秋战国时代的，那个齐国和鲁国交界的地方。 淄博はね、春秋戦国時代の、あのう、齊国と魯国の境にあるところです。	I	S
19	*	CF2	是吗。 そうですか。	N	

「質問-応答型」(Q)と「相互話題導入型」^[註4](S)を区別する場合、前者は質問の形式で話題を導入するのに対して、後者は実質的発話で話題を導入する傾向がある。

4 結果と考察

4.1 話題展開パターンの全体的な結果

以上の基準に従い、話題展開パターンの観点から学習者の中国語と日本語のデータをコーディングし、「質問-応答型」(Q)と「相互話題導入型」(S)の2つの展開パターンに分類した。集計した結果は表2に示す通りである。

表2 学習者初対面会話展開パターン集計結果

	Q出現数(割合)	S出現数(割合)	合計
日本語データ	108 (59%)	76 (41%)	184 (100%)
中国語データ	109 (47%)	122 (53%)	231 (100%)

Q:「質問-応答型」 S:「相互話題導入型」

カイ二乗検定をかけた結果、有意水準5%で有意差が認められた(自由度1, $\chi^2=5.438, p<.05$)。従って日本語学習者の話題展開パターン(「質問-応答型」(Q)と「相互話題導入型」(S))は使用言語(日本語か中国語か)と関連があると言えよう。

4.2 言語別の話題展開パターンの具体的な結果

具体的に各グループの会話を見ると、日本語の会話は図1のようになる。10

組中6組(会話1、2、5、6、9、10)では「質問-応答型」が「相互話題導入型」より多く見られた。つまり、本データにおいては、学習者の初対面日本語会話の展開パターンとしては「質問-応答型」が「相互話題導入型」よりやや多く現れる傾向があったと言えよう。

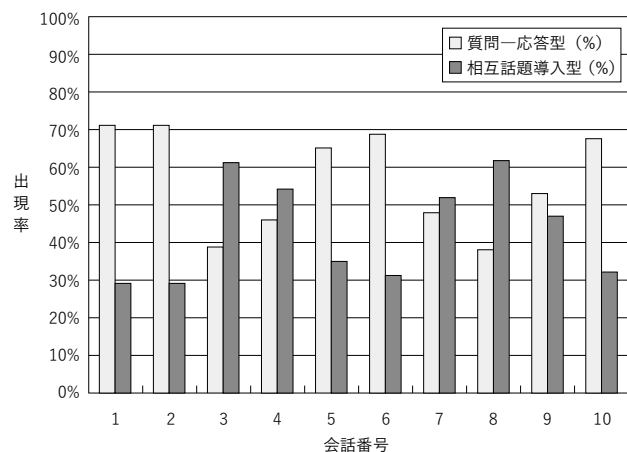


図1 学習者初対面日本語会話話題展開パターン分布図

次は中国語の会話(図2)に焦点を当てる。図2に示すように、10組中6組(会話1、2、3、4、6、8)では「相互話題導入型」が「質問-応答型」より多く出てきた。つまり、本データにおいては、学習者の初対面中国語会話の展開パターンとしては「相互話題導入型」が「質問-応答型」よりやや多く現れる傾向があったと言えよう。

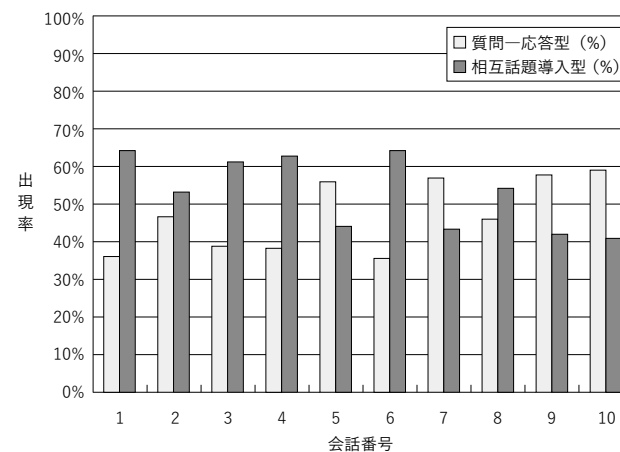


図2 学習者初対面中国語会話話題展開パターン分布図

宇佐美・嶺田(1995)の初対面母語話者同士の会話分析によると、「質問-応答型」は目上対目下会話に、「相互話題導入型」は同性・同等等による弾んだ会話に多く見られたということである。本研究では同性で同学年の学習者同士の初対面会話を対象としたが、日本語で会話する場合、会話例5に示したように「質問-応答型」が多く見られた。

会話例5

ライン番号	発話文終了	話者	発話内容	カテゴリー	展開パターン
91	*	CFB8	「NCF8姓」さんは何年生です?。	I	Q
92	*	NCF8	はい、4年生です。	N	
93	*	CFB8	「NCF8姓」さんは、会社、会社に入りたいですか。	I	Q
94	*	NCF8	うん、そうです。	N	

一方、母語である中国語で会話する場合、会話例6に示したように、「相互話題導入型」が多く出てきた。CF4は内モンゴルへ旅行に行くときの話をしている。CFB4はオーバーラップをしたり(ライン番号58)、笑いながら話したりする

ことによって積極的に会話に参加し、全体的に和やかな会話の雰囲気が伺える。

会話例6 [注5]

ライン番号	発話文終了	話者	発話内容	カテゴリー	展開パターン
57	*	CF4	那块儿, 然后看蒙古草原, 就是蒙古族的<跳舞>{<}. あそこで、その後モンゴルの草原を見る、モンゴル族の<民族舞踊も>{<}。	I	S
58	*	CFB4	<跳舞>{>}。 <民族舞踊>{>}。	N	
59	*	CF4	很好玩儿, 特别好看, 挺好玩儿的。とっても面白くてきれいだよ、すごく面白いと思う。	N	
60	*	CFB4	那边就是 【】。 あそこは 【】。	I	S
61	*	CF4	【】 那边儿人说话跟打架似的, 声音特别大。 【】 あそこの人たちは話の音が大きくて喧嘩するみたい。	N	
62	*	CFB4	<边笑边说>打架。 <笑いながら>喧嘩するって。	N	
63	*	CF4	然后骑, 都会骑马, 还有骆驼呢, 还有羊。それから乗る、みんな馬に乗れる、あとは駱駝、羊もいるよ。	I	S

学習者は日本で会話する場合、会話例5のように「質問一応答型」が続くことで会話が単調になっている傾向がある。一方、中国語で会話する場合、相互に話題を導入することで、会話が盛り上がっている傾向がある。これは目標言語である日本語を使用する場合、母語である中国語で会話する時と比べて言語能力が制限されるため、結果的に弾んだ会話が少なくなったのではないかと考えられる。

また、中国での日本語教育の現状を考えると、教科書が学習者に与える影響も否めない。今回協力してくれた学生は、必修科目の「基礎日本語」で、『新編日語』(1993)という教科書を使用している。その教科書に載っている会話文には「質問一応答型」の発話文が多く、全体の約85.2%を占めている。さらに、学習者のフォローアップ・インタビューでは「普段日本人と接することが少な

いので、教科書(『新編日語』)の内容を暗記することが多い。実際に日本語を使ってみるとコミュニケーション能力の不足を感じた」という意見があった(ベース協力者10人中6人)。よって、今回の調査において日本語の会話に「質問一応答型」の会話が多くみられたことには、教科書による影響も1つの要因として考えられる。

以上のようなことから、本研究の日本語教育への応用の可能性を考えると、日本語教科書を作成する際には、学習者のコミュニケーションの多様性を考慮に入れ、「質問一応答型」以外に「相互話題導入型」もテキストに入れる必要があるのではないかと、ということが言える。さらに、教室活動では、はじめに「質問一応答型」でお互いに情報を聞き出してから徐々に共通の話題を見つける、佐々木(1998)でいうところの「インタビュー・スタイル」から、お互いに意見を述べ合う「話し合いスタイル」へと移行していくよう指導することが必要ではないかと思われる。

5 今後の課題

本研究は学習者同士の会話データだけ取り扱ったが、今後の課題としては日本語母語話者同士の会話データも収集し、「日本語」の会話と「中国語」の会話の展開パターンの違いを比較することを視野に入れて、更なる研究を進めていきたい。さらに、学習者同士の会話データとしては男性同士の会話データ、レベルの異なる学習者同士の会話データ、JSL環境下(日本)とJFL環境下(中国)の学習者同士の会話データなども収集して、初対面会話における話題展開パターンだけでなく、話題選択、導入の仕方などを含めてより多角的に探っていきたい。

〈東京外国語大学大学院生/中国 燕山大学〉

注

[注1] …… 当校のキャンパスは本校と「二級学院」と呼ばれる分校がある。

[注2] …… 話題展開パターンに注目して分析していくため、「話題カテゴリー」の中の

挨拶 (G) の部分を除いてコーディングする。

- [注3] …… 学習者の誤用は分析対象としていないため、話題展開パターンに影響を与えない限りは訂正しないことにした。
- [注4] …… 紙面上の制限により省略するが、コーディングする場合、「相互話題導入型」を叙述型、確認型、自問自答型、感想型と下位分類した。
- [注5] …… 表中の記号については、<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm>を参照のこと。

参考文献

- 宇佐美まゆみ (1993) 「初対面二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー：話者間の力関係による相違—日本語の場合」『ヒューマン・コミュニケーション研究』21, pp.25-39. 日本コミュニケーション学会
- 宇佐美まゆみ (1998) 「初対面二者間会話における「ディスコース・ポライトネス」」『ヒューマン・コミュニケーション研究』11, pp.49-61. 日本コミュニケーション学会
- 宇佐美まゆみ (1999) 「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ」『日本語学』18 (11), pp.40-56. 明治書院
- 宇佐美まゆみ (2001) 「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること」『語学研究論集』6, pp.1-29. 東京外国語大学語学研究所
- 宇佐美まゆみ (2007a) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」について」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』pp.17-36. 平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B (2) 研究成果報告書 (課題番号15320064)
- 宇佐美まゆみ (2007b) 「基本的な文字化の原則 (BTSJ) の中国語への応用について」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』pp.83-103. 平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B (2) 研究成果報告書 (課題番号15320064)
- 宇佐美まゆみ・嶺田明美 (1995) 「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン：話者間の力関係による相違—日本語の場合」『日本語学・日本語教育論集』2, pp.130-145. 名古屋学院大学留学生別科
- 熊谷智子・石井恵理子 (2005) 「会話における話題の選択—若年層を中心とする日本人と韓国人への調査から」『社会言語科学』8 (1), pp.69-81. 社会言語科学会
- 国際交流基金 (2011) 『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2009年』国際交流基金
- 佐々木由美 (1998) 「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話」『異文化間教育』12, pp.110-127. 異文化間教育学会
- 張瑜珊 (2006) 「台日女子大生による初対面会話の対照分析—初対面会話フレームの提案を目指して」『人間文化論叢』9, pp.223-233. 御茶ノ水大学大学院人間文化研究科
- 中井陽子 (2003) 「初対面日本語会話の話題開始部／終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16, pp.71-95. 早稲田大学日本語研究

教育センター

- 西郡仁朗 (1996) 「外国人と日本人の初対面会話の分析—相手への印象に影響を及ぼす要因」『日本語教育学会秋季大会予稿集』
- 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析」『日本語教育』103, pp.49-58. 日本語教育学会
- 周平・陳小芬 (編) (1993) 『新編日語』上海外語教育出版社